

岐阜県方言における否定表現

Some description on negative expressions in Gifu dialects

山 田 敏 弘

YAMADA Toshihiro

lingua@cc.gifu-u.ac.jp

1. はじめに

岐阜県、特に県庁所在地である岐阜市近辺では、否定を表す場合に、文末では「ン」とともに「ヘン」の形を用いる。

(1) ちょっと雨，{降らん/降らへん}。

(2) いっしょに映画見に {行かん/行かへん} ？

(3) テストで名前 {書かなんだ/書かんかった/書かへなんだ/書かへんかった}。

(1)～(3)の場合、もちろん、他の要因により強意的ニュアンスを伴うことはあるが、通常、「ヘン」には何ら強意的ニュアンスはなく、「ン」と同様の機能を持った形式として用いられている。

しかしながら、県内全域で同様の否定表現が用いられているわけではない。終止形だけを例に挙げても、「ヘン」の代わりに「セン」を用いたり、前接する動詞の形態もさまざまである。また、「ン」と「ヘン」がどのように用いられているか、実際の運用についてもまだまだ不明な点が多い。

このような岐阜県方言の否定表現については、語彙集の中に動詞と一緒に否定の形が書かれている程度の記述が多く、また記述があっても形式が挙げられる程度にとどまり、管見の限り、まとまった記述は少なく研究もほとんどない。

本考察では、このような岐阜県方言における否定表現について、現段階での調査結果を少しまとめて記述しておくことで、将来行われることが期待される否定に関する全県の調査への下準備を行っておきたい。

考察の手順としては、まず非過去終止形について概要を掴んでいく。第2節では先行研究や方言集等の記述から否定に関する記述をまとめて示し、岐阜県方言における否定表現の概略を示す。次に第3節では、県内各地において行った臨地調査などから、否定に関する調査結果をまとめて示し、併せて岐阜大学の学生に対して行った調査から数量的なデータを示し、現在の岐阜県方言における否定表現の用いられ方を考察していく。第4節からは終止形以外の形式も合わせ第3節と同じ手法で得られたデータを利用しながら考察を行う。

なお、本考察では岐阜方言の形式を引用する場合には、原文の表記の如何によらずカタカナで示す。

2. 先行記述

岐阜県方言のまとまった記述的研究としては、奥村三雄編 (1976) が第一に挙げられる。奥村編 (1976) では県内各地域の音韻、語彙、文法全般にわたって詳細な記述が行われているが、そこから否定に関する記述をまとめると以下の通りになる(空欄は当該の活用に関する記述が見あたらない部分)。

なお、否定を表す助動詞は活用をもち、過去の形などももちろん存在するが、ここでは煩を避け、概略を示すために終止形を挙げるにとどめる。

	動詞				形容詞	形容動詞
	五段動詞	一段動詞	カ変動詞	サ変動詞		
西美濃地方 (武儀郡・美濃加茂市以西)	書カン 書カ{セン} {ヘン}	見ン／寝ン 見{イ}{セン} {ヤ}{ヘン} 寝{エ}{セン} {ヤ}{ヘン}	コン 来{イ}{セン} {ヤ}{ヘン}	セン ¹ セ{エ}{セン} {ヤ}{ヘン} セ{エ}{セン} {ヤ}{ヘン}		(シズカ) ヤ アラヘン
東美濃地方 (土岐市以東)		見ラン 見リャヘン/ 見ヤヘン		セラ セン／シン セリャヘン/ シヤヘン		
飛驒地方・ 郡上地域	行カン ² ・行カヘン	書ケン				

表1 奥村編(1976)に見られる否定辞の地域別・活用別記述

奥村編(1976)は、各地域の記述者が独自の方法にて記述を行っているため、否定など文法的な項目に関しては、動詞であっても活用ごとに記述のない場合があるなど、網羅的な記述が行われていない。また、敢えて空欄として提示し残したが、形容詞の否定形がどのような形で表されるのかについては、いずれの地域についても触れられていない。

県内各地で編まれているさまざまな方言集には、語彙と並んで文法的要素を含む項目が挙げられているものも多い。これらの方言集を素材にして文法的要素を抽出することによって、すでに山田敏弘(2002)で飛驒方言について、また山田敏弘(準備中)にて東濃方言について、文法項目をまとめて分析を行っている。

飛驒方言については、土田吉左衛門(1959)、二村利明(1988)、岩島周一(1996)等の語彙集に見られるほとんどの動詞の否定形が、カ変動詞の「コン」を含め、「ン」によるものである。「セン」を用いている否定については、他に「アリャセン」「アワセン」「ミエヤセン」「デキャセン」「シヤセン」「コヤセン」などが見られる。用例の数としては少数である。「ヘン」による否定は、わずかに旧益田郡地域の記述として3例を見るにとどまる。珍しいところでは、確認要求の用法としての訳が付けられているが、「アルナイカ」という形で、「あるではないか」という意味を表すと、土田(1959)には一例が挙げられている。単純な否定を表す形式としては「ン」がほとんどと言ってよいだろう。

形容詞の否定の形について、飛驒方言においては、「オソゴーナイ」「エローナイ」などの形が見ら

¹ 西美濃地方のサ変動詞の否定に関しては、次のような記述がある。

否定形は、シ(シーヘン・シン)とセ(セーヘン・セン)との両形が認められる。板取・岐阜・美濃などいずれもその併用状態である。その他、各活用形に関し、いろんなユレが認められるが、これは、この西美濃地方に限らないようである。(同:228)

カ変に関しては、岐阜市あたりの終止形について、次のように述べられている。

岐阜市あたりでは、ヘンがカ変動詞につくとき、コオヘン・コヤヘン・キャヘン等の諸形が併存するようである。(同:230)

² 飛驒地方の否定表現については、次のような記述が見られる。

岐阜市はじめ県下各地では、「行カヘン」などヘン形が圧倒的であるが、高山地方では余り著しくはない。むしろ、行カセンなど、セン形の方がよく用いられる。高山地方で若干認められるヘンも、あたらしい時代における美濃方言の影響と見られる。(同:293-294)

れるほか、形式名詞のコトを用いて「コワイコタナイ」「ツベタイコタナイ」のごとく表現する方法が二村(1988)にいくつか見られる。

原資料の記述など、詳しくは、山田(2002:43-48)を参考にされたい。

美濃地方北部、郡上郡においては、前稿山田敏弘(2003)にもまとめて記したが、岐阜県立郡上高校方言研究会編(1952)に、おおよそ否定辞としては「ン」が用例中で用いられている。「ヘン」による否定は見られないが、「セン」については、「ワラヤセン」「アヨベリヤセン」の2例が見られる。いずれも「笑いはしない」「歩けやしない」のように、普通の否定というよりも強意のニュアンスを含む訳が添えられており、この点では現在岐阜市あたりで行われている単純な否定を表す「ヘン」と、機能的に異なるものと考えられる。

東濃方言においては、まだ十分に資料としてまとまっていないが、恵那郡教育會編(1903)と瀬戸重次郎(1934)から否定についての記述を拾ってみる。

恵那郡教育會編(1903)には、わずかに「アキャセン(p.1)」「ケン(p.15)」「シン(p.20)」の3語が(反語を除いた)否定表現として見られるのみである。このうち、「アキャセン」には、「あかん」ではなく「あきませぬ」の訳が付けられており、「ません」とはまったく語源は異なるが、単純な否定である「ン」よりも何らか強意のニュアンスが強い表現と捉えられている可能性は否めない。他の「ケン」は「くれん」との訳があり、「ン」という否定辞自体が取り上げるべき特殊な語形と捉えられていないという可能性も伺わせるところである。

瀬戸(1934)も語彙に関する記述であるが、東濃地方(当時の恵那郡全域と土岐郡全域)のことばとして否定を含む項目を挙げてみる。

長野県寄りに位置する恵那郡では、「ン」について「ドンダラン(どうもならぬ)」と「ネラン(ねない)」が見られるほか、「ミヤセン(見はしません)」「立テラセン」のような「セン」の形と、「イキャヘン(行きませぬ)」「ミヤヘン(見はしません)」「見テラヘン」のような「ヘン」の形とが記述されている。興味深いのは、各項目に付けられた共通語訳の部分で、助動詞「ラセン」「ラヘン」の用例として添えられた「立テラセン」「見テラヘン」については不明であるが、「セン」と「ヘン」には「見はしません」のような強意が込められたものと、「行きませぬ」のような丁寧形で表されたものがあることである。この点で恵那郡教育會編(1903)の記述と同じく、単純な否定とは言えないニュアンスがあった可能性も否定できない。また、奥村編(1976)にも指摘がある一段動詞の否定形は、「ン」を伴う場合にのみ五段化して「寝ラン」となる指摘があるが、これは「セン」や「ヘン」を伴って「*寝リヤセン」「*寝ラヘン」となることは、少なくともこの記述の範囲ではない(「*」は未確認の形式を示す)。

土岐郡に関しては「コタアラレン(こたへられない)」「ドウナラン(できません)」「ハマガアハン(意見が合わぬ)」に「ン」を伴う否定形が見られるほか、「ハイリヤセン(入らない)」「セヤセン(しやしない)」に「セン」,「クレヤヘン(下さりませぬ)」「ヤリヤヘン(やりませぬ)」に「ヘン」の形の否定が見られる。

否定に関してはほかに、反語の「スカ(ものか。反語)」と「ソウヤラアズ(さうではあるものかちがふ)」の記述が恵那郡について見られるほか、珍しいものとしては「ミッコナシ(見ないで)」「セッコナ(しないで)」「セランコナ(しないで)」のような否定依頼とおぼしき形式が見られる

西濃の方言に関しては、杉崎好洋・植川千代(2002)に、次のような記述が見られる。

2) 打消形

そのままでは使用されず、助動詞2類-セン・-ヘン(否定)が接続する。

カカ-ヘン・カカ-セン <書かない>

2拍の一段動詞には次のように2種類, 3拍以上の一段動詞には3種類の打消形が見られる。

ミー-ヘン・ミヤ-ヘン <見ない>

オキ-ヘン・オキー-ヘン・オキヤ-ヘン <起きない>

(同: 331より)

岐阜市のことばが大きく影響を受けていると考えられる名古屋を中心とした愛知県尾張地方のことばについては、芥子川律治(1971:137ff)に詳細な記述がある。終止形について箇条書きで概略をまとめておく。

- ・「ン」が「現在の名古屋方言の普通の表し方である(p.137)」
- ・「否定表現のもう一つの形 (p.139)」に「セン」がある。「ン」と「同じ働きをもっている(同)」が「セン」のほうが「やや否定の仕方がぼやけている。やや婉曲さがある。(同)」特に疑問に対して返答する際には「『いや、おれは行けません』という言い方の方がほとんどである(同)」
- ・「セン」の否定は、五段動詞の場合「行ケセン」「ヤレセン」であり、一段動詞は「見イセン」、サ変動詞が「シイセン」、カ変動詞が「コオセン」となる。

3. 県内各地における記述からの考察

本節では、4つの手法によって集められたデータをもとに、前節で見た岐阜県方言における否定表現を掘り下げて考察していく。ここで用いる4つの手法とは、①県内各地の臨地調査による調査結果の分析、②県内各地の方言談話データからの分析、③岐阜大学にてアンケート調査によって得られた結果、④岐阜市の中老年層からアンケート調査によって得られた結果である。①②からは主に、老年層の否定表現の使用が観察される一方、③からは新しい傾向、④は推移が伺える。

以下、順に考察を行う。

3.1 県内各地における臨地調査による否定辞使用の分析

2001年に岐阜大学に着任して以来、岐阜県内各地を回って集めたデータから、特に否定辞に関するものを取り上げる。

位置の確認をかねて、臨地調査に赴いた場所を列挙する(地図1)。地名は調査時のもの。なお、被調査者名を挙げるのは差し控える。

- 郡上郡：白鳥町石徹白, 明宝村気良, 明宝村小川, 八幡町城南町, 和良村三庫
- 益田郡：金山町
- 土岐市：泉町, 鶴里
- 可児郡：御高町
- 加茂郡：坂祝町
- 揖斐郡：揖斐川町, 藤橋村
- 不破郡：垂井町



地図1 臨地調査地点 (2001-2004)

否定辞に関しては、ひとりが複数の語形

を使用すると回答する傾向が非常に強いことと、今回、地点によっては一地点での調査が複数のインフォーマントによる場合があることから、分布を地図上に表すとやや煩雑になるため、詳しくはデータの一層の集積を待って別稿を準備することとして、ここでは大きく調査結果の概要を示すにとどめたい。

まず、北から見ていくと、今回の調査の最北地域である郡上郡各地域では一般に「降ラン」「食ベン」「来ン」など「ン」による否定が一般的で、ほぼ全地域で優勢な語形としての回答が得られた。なお、サ変動詞の「スル」はおおよそ老年層では「セン」であるが、60歳あたりを境に「シン」という形が併用されるようになってきている。

「ン」以外には、「降リャセン」「行キャセン」のように、語源として「～やせぬ」につながりやすい形式が50歳以上の年齢において多く用いられている。白鳥町や大和町のような郡上郡北部および、八幡町でもやや山間に入った河鹿地域の出身者によってわれている。五段動詞の場合、未然形接続化した「降ラセン」「行カセン」は、「降リャセン」「行キャセン」よりもやや南で用いられている傾向が見られるが、十分な資料数ではなく、検証が必要である。

「ヘン」に関しては、八幡町のインフォーマントから、八幡町よりも南の美並村のことばであるとの内省を得ており、それを裏付けるかのように、武儀郡と近い位置にある八幡町小那比地区出身者から「ヘン」使用との回答が得られた。

総じて郡上郡では、「ン」の圧倒的優位の中に、「セン」が併用され、より新しい語形であると考えられる「ヘン」が地域によって、また年齢によって観察されるということが調査結果から得られた。いずれにしても、郡上郡については、広く十数地点20人以上のインフォーマントからの調査結果が得られており、さらに調査地点数を増やしていずれ別稿を用意する予定である。

位置的には郡上郡各地よりも南であるが飛騨地方に属する益田郡金山町における調査においては、60代から70代の3名の女性に回答をいただいた。結果としては、おおよそ「ン」が主流であることは事実として間違いない。「ン」の他の否定辞については、五段動詞の「降る」「行く」で「フラヘン」「イカヘン」も使用すると回答を得た。一方、一段系の動詞³については、「寝る」のような語幹が一音節の場合、「ネヤヘナンダ」の形で「ヘン」を用いると回答した話者があったり、「来る」が「コーヘン」になったりすることを除いて、一般に「ヘン」は使わないとのことである。この点で、五段動詞と一段動詞が否定辞との相性においては異なる振る舞い方をすることが伺われる。なお、サ変動詞に関しては「セン」が用いられ、「セーヘン」や「シーヘン」のような「ヘン」は用いないとのことである。

東濃地域では、土岐市の60代と70代の男性2名から回答をいただいた。全般的な傾向としては「ン」のほかに、「ヘン」も用いられるようである。

五段動詞に関しては動詞によって揺れがあるが、「フリャヘン」のような拗音が入る形式の方が、直音化し未然形接続と同形となった「フラヘン」よりも主流とのことである。「オヨギャヘン」よりも「オヨガヘン」を用いるのは「よそいき」という感覚があるとの回答も得られた。

一段系の動詞では「タバヤヘン」「コヤヘン」「シヤヘン」のような「ヤ」が保持された形式が用いられ、長音化した「タベーヘン」「コーヘン」「シーヘン/セーヘン」のような形は用いられないとのことである。なお、サ変動詞の「ン」の形は土岐市北部の泉地区では「シン」、南部の鶴里地区では「セン」の回答のほかに「セナイ」という形も得られた。

西濃地域では垂井町の70代男性、揖斐川町の80代男性、藤橋村の70代の女性の3名からの回答が得

³ 動詞の活用は、従来の国語学で言われている五段、上一段、下一段、サ変、カ変のうち、五段動詞を除く残り4つの活用が、母音語幹を持つものとしてまとめられる。ここでは五段動詞を除く上一段、下一段、サ変、カ変の動詞を一段系動詞としてまとめて扱う。

られた。関西との往来の街道上にある垂井では、「フラヘン」「イカヘン」のように「ヘン」が「ン」と同程度用いられるとのことである。ここでは一段動詞は、「見る」や「寝る」のような一音節語幹を除き、すでに70代でも短形化して「タベヘン」のような形が用いられるとのことであった。カ変は「コーヘン」、サ変は「セーヘン」である。

やや北に入った揖斐川町や藤橋村では、五段動詞に「フラセン」「イカセン」のような「セン」の形が多く残る。揖斐川町のインフォーマントから「フリャセン」も聞くが「フラセン」のほうがよく使うとの回答が得られたように、接続は未然形へと移行している。一段動詞に関しては、一音節語幹の場合「見ヤセン」のように「ヤ」を介するが、揖斐川町では二音節以上で「タベセン」のように短形化する傾向がやはり見られた。藤橋村では、一段動詞「食べる」の否定形は「ン」以外に得られなかった。やはり「食べる」という語が使用語彙でなかった可能性も否めない。なお、カ変はコヤセン、サ変は「シヤセン」であった。

県内臨地調査から得られた結果のまとめとしては、老年層での分布はおおよそ、飛騨および奥美濃と呼ばれる郡上郡において、「ン」が圧倒的優勢であり、「セン」や「ヘン」が一部に見られる状況である。「ヘン」が用いられる東濃西部や中濃地域においては、「ヘン」が用いられはするものの、「ヤ」の痕跡が見られる形式を用いるようである。一方で、関西に近い西濃地域では、一音節の一段系動詞を除いて「ヤ」の痕跡はかすかにとどめられるだけであり、「ヘン」が「セン」に移行するよりも早くから短形化が進んだものと考えられる。

3.2 方言談話資料に見られる否定辞使用の分析

3.1節で行ったような臨地調査が、意識の面を探るには欠くことのできない調査であることは否定しないが、一方で、「言わんとは言わん」に代表されるような、意識と無意識な使用とのギャップの存在も可能性として考えておかなければならない。また、否定辞のように「ン」と「ヘン」のような、機能的に差がないと考えられている複数の形式をもつような場合、頻度や機能的な差における傾向として見られる可能性も捨て去ることはできない。この点で、談話資料は有用な側面をもつ。

方言談話資料中で用いられている否定辞に関しては、すでに山田敏弘(2004b)にて詳しく分析を行ったので、ここでは、その分析の概略のみを簡単にまとめて示す。

まず、談話資料中に見られた否定に関する形式の数を比較して示す。談話資料に関する詳細については、山田(2004b)を参照されたいが、1つだけ断っておかなければならないことがある。談話資料の長さもさまざまであり、また話題によっても否定表現が頻出する場合もそれほど見られない場合もある上、話者によって個人差もある。その中でおおよその地域的傾向を見るものであると理解されたい。なお、数字は過去形を含む。

否定辞	I-2 岐阜市	I-3 羽島市	I-4 白鳥町	I-5 金山町	II-2 羽島市	II-3 福岡町	III-3 岐阜市	IV-2 江南市
ン	3	10	3	21	14	32	2	17
ヘン	4	10		1	45	17	10	3
ヒン							2	
セン					3			7

表2 方言談話資料に見られる否定辞の使用回数

Iはおおよそ老年層を中心とした会話、IIは老年層とその他の世代との会話、IIIは中-若年層が主

体の会話である。IVとして県外ではあるが愛知県江南市（尾張地方）の談話も参考に挙げておく。

I-4として示した白鳥町歩岐島の老年層の会話において「ヘン」が見られなかったのを除いて、おおよそどの方言談話資料にも「ン」と「ヘン」の併用が観察された。ただし、その使用の割合に関しては、大きな差が見られた。I-5として示した益田郡金山町の会話とII-3として示した恵那郡福岡町の会話では「ン」が優勢である。特に金山町では「ヘン」が「来る」の否定である「コヤヘン」で一例用いられているだけであり、圧倒的に「ン」が多い。これは、第2節で見た飛騨方言では「ン」が優勢であるという記述と合致する結果である。

東濃では古くは「セン」を用いたとの記述があるが、今回の資料には見られず、代わりに「ヘン」がかなりの高率で用いられていることがわかる。福岡町の場合、いずれも「アル」という動詞に限って「アレヘン」の形で「-eヘン」が観察された。そのほかの動詞の場合、拗音を介して「-ャヘン」の形が「オコリャヘン」「オリャヘン」の2例観察された。

逆に「ヘン」が優勢なのは、岐阜市や羽島市のような中濃地方においてであり、「ヘン」が西から東進してきた様子がかがえる。ただし、II-2に示した羽島市の老年層話者の会話には、「セン」も3例観察され、愛知県方言へとつながる特徴が伺える一方、岐阜市近辺の談話であるIII-3では、小学生が「シーヒン」というサ変動詞の否定形において「ヒン」を1回だけ用いている、

談話資料からの分析結果については、第4節にて、文法的特徴の記述を行う際にも触れていく。

3.3 岐阜大学生に対するアンケート結果からみる否定辞使用の分析

ここでは、現在の大学生世代において、岐阜県内で否定辞がどのように用いられているかを、岐阜大学生に対して行ったアンケート調査から見ていくことにする。

ここに提示するアンケートからの結果は、2004年度共通教育科目「岐阜県方言のしくみを学ぶ」受講者の内の岐阜県出身者97名と、2003年度の国語学各論IVにて調査した29名を加えた126名分である（ただし、出身地を回答していないなどの学生は除いた）。年齢は少数を除きいずれも20歳前後と理解されたい。なお、出身地については、できるだけ合併4前の町村名を答えるよう学生に要求したが、それでも合併後の地名を答えたものが何人かいたため、合併後の区分にて示さざるを得なかった。

なお、調査実施年度により設問の形式は若干異なるが、いずれも「自分で使う」という回答をしたものを「使用」と位置づけて処理した。

まず、五段動詞に関して、岐阜県内の大学生が、普段、「地元で」「ヘン」を用いているか（用いてきたか）に絞って見ていくことにする。この調査の結果は、設問の都合上、2004年度回答分に限って示す。

どうしても都市部である中西濃南部地域の出身者が回答者としては多くなり、岐阜県全体の分布を掴むまでにはいかなないのがこの種のアンケートの悩みの種であるが、おおまかな傾向を掴むことはできるであろう。

先行研究の記述を裏付けるように、飛騨地方には「ヘン」の使用は、この調査からは観察できなかつ

⁴ 21世紀になってからの岐阜県内の町村合併は以下の通り（時期の早い順。本考察刊行時まで）。

山県市(←高富町, 美山町, 伊自良村 (いずれも山県郡)) =2003年4月

瑞穂市(←穂積町, 巣南町 (いずれも本巣郡)) =2003年5月

本巣市(←根尾村, 本巣町, 糸貫町, 真正町 (いずれも本巣郡)) =2004年2月

飛騨市(←神岡町, 河合村, 宮川村, 古川町(いずれも吉城郡)) =2004年2月

郡上市(←白鳥町, 高鷲村, 大和町, 明宝村, 和良村, 八幡町, 美並村 (いずれも郡上市)) =2004年3月

下呂市(←馬瀬村, 萩原町, 小坂町, 下呂町, 金山町 (いずれも益田郡)) =2004年3月

恵那市(←恵那市, 岩村町, 山岡町, 明智町, 串原村, 上矢作町 (恵那市を除きいずれも恵那郡)) =2004年10月

羽島郡川島町→各務原市=2004年11月



地図2 五段動詞+否定辞のヘン(行カヘン)の使用

た。この調査以外の学生に対する聞き取り調査などからも、飛騨地方での「ヘン」の使用はまず観察されないことがわかっており、おおよその傾向がこの地図にも現れているといつてよいであろう。

もう1つ観察されたのが、中濃地域以東での「ヘン」使用の弱さである。まだ確実なことを言えるだけのデータ数ではないが、それでも加茂地域、可児地域では△が多く見られる。残念ながら、この地区での老年層に対する臨地調査は十分には行えておらず、今後の調査を待たなければならない。

奥村編 (1976) に「高山地方で若干認められるヘンも、あたらしい時代における美濃方言の影響と見られる」との記述があることは、注1でも触れたとおりである。この記述から30余年経過したが、高山地方には、「あたらしい時代における美濃方言の影響」は、今回の調査に限って言えば、ほとんど進んでいな

いと言ってもよいだろう。ただし、今後、もう少し詳細な飛騨地方での否定辞使用に関する調査が必要になってくるだろうことは言うまでもない。

五段動詞について今回は、いわゆる未然形語幹に後接する場合のみを調査した。これは「行ケヘン」のような形は可能の否定形であると勘違いされる可能性が否定できなかつたためである。教養の授業を受けている1年生に対するアンケートでは、同じ形式に複数の意味・機能が存在する場合に、それを意味・機能ごとに確実に回答されているかは、慎重に取り扱わざるを得ないところである。3.2節で見た談話において未然形以外の形式に「ヘン」が付く用例が観察された羽島市など南部の愛知県に接する地域では、今回、未然形+ヘンの回答が多かつたことから考えて、岐阜県内の「ヘン」は未然形接続へ収斂していつていると考えることが妥当であると思われるが、△と回答した地域などで未然形以外の形式に接する形があるために、「行カヘン」という形式の使用が押さえられているとも考えられなくはない。今後はこの点についても調査しなければならない。

一方、一段動詞に関しては、「食べる」を例に取ってみると「食べヘン」と「食べーヘン」の2形式が若い世代では多く使われていることが分かっている。語源的な「食べやせぬ」から考えれば1拍分長音によって保持された「食べーヘン」のほうがより古い語形であると考えられるが、「食べヘン」のような短い形は、岐阜市のような地域においても、より若い世代で優勢になっているとの印象も受ける。

この点を明らかにすべく、「食べヘン」と「食べーヘン」について、その使用を調査した。結果を地図3に示す。なお、一段動詞に関しては2つの語形を比較するため、データの扱いは煩を避けやや簡略化して、地図2での示し方とは異なり、「自分で使用する (地図2の●)」場合のみを、「使用」と位置づけ、それ以外を「不使用」として処理した。

地図3を見てみると、「食べヘン」という短形を用いる傾向は、西濃地域の中心である大垣市に顕著に見て取れる。大垣市では、回答した12名のうち、10名までが、「食べヘン」のみを使用し、「食べーヘン」のような長形は用いないとの回答をしている。

短形のみを用いるとの回答は、東濃の蛭川村や中濃域にも存在していることにも注意しなければな



地図3 一段動詞「食べへん」と「食べーへん」の分布

ヤセン」, 巢南町と恵那市で「食べーセン」との回答が学生から得られたが, 岐阜県内の若年層での使用は少数派である。

3.4 岐阜市で使用される否定辞の変化

第2節および3.1, 3.2節で, おおよそ老年層を中心とした否定辞使用の記述をまとめることができた。一方, 3.3節では, 県内各地における若い世代の否定辞使用の実態がある程度明らかにできたものと考えられる。最後に岐阜市を中心とした地域における否定辞使用の世代差を調査できたので, その結果を挙げておく。

調査にご協力頂いたのは, 岐阜西ロータリークラブの会員およびゲストの42名(すべて男性)の方々である。調査日は, 2004年8月30日で, 今回は, 岐阜市内出身者34名についての調査結果を示す。生年は大正6年(1917)~昭和35年(1960)で, 5年ごとに区切って示す。

まず, 「へん」および「セン」の分布を見ていく。回答は, 「よく使う」, 「使うことがある」, 「使わない」の3つから, 形式ごとに1つを選択してもらったもので, それぞれ●, ○, ×で表す。また, ーは未記入の回答を示す。

まず, 五段動詞に関して「アル」の否定形を見ていく。形式として, ここでは「アラへん」「アレへん」「アチャへん」「アラセン」「アレセン」「アチャセン」の6形式を取り上げた。

らない。県庁所在地である岐阜市では, わずかに「食べーへん」のみを使用するとする回答が1例のみ得られているが, やはり「食べへん」の使用が, 併用を含めて圧倒的である。

一方で, 西濃地方の大垣周辺部においては, 回答者数が少ないためはっきりしたことは言えないが, 大垣市ほどの「食べへん」への収斂が見られるとは言い難い。このことから, 「食べへん」は, 大垣や岐阜市のような都市部を中心に, 併用を経て, 短形のみを使用するようになっていったものと基本的には考えられる。

いずれにしても, 各地域での世代別調査などがもう少し必要であることは言うまでもない。この点については次節で詳述する。

なお, 「へん」よりも古い形であると考えられる「セン」については, 2003年度の調査でのみ調査を行ったが, 養老町で「食べ

生年	アラヘン	アレヘン	アリャヘン	アラセン	アレセン	アリャセン
1917 - 1924	●●	●-	○-	●-	○-	○-
1925 - 1929	●●○	●●○	○××	●○×	●××	○○×
1930 - 1934	●●●	●×-	××-	●×-	××-	××-
1935 - 1939	●●●●○ ○○	○×××× --	●○××× --	●○××× --	○×××× --	●●○○× ×-
1940 - 1944	●●●●● ○×	○○××× ××	○○××× ××	○×××× ××	○×××× ××	○○○×× ××
1945 - 1949	●●●●○ ○	○×××× ×	○×××× ×	●○××× ×	●○××× ×	○○××× ×
1950 - 1954	●●●○	○○××	○×××	●○××	○○××	○○××
1955 - 1960	●×	●○	●×	××	××	○×

表3 岐阜市における年代別否定辞の使用（五段動詞）

表3を見ると、率直なところ「どれもよく聞く」表現との認識があるように見受けられる。おおよそすべての年齢にわたってすべての形式に、●もしくは○で回答した人が1人はいるということは、どのような組み合わせであってもありうるような、まさに否定辞が「ヤセン」から未然形接続の「ヘン」への変化する過渡期に生きている証左とも言えよう。

そのなかでも「アラヘン」の使用が圧倒的に優勢であることは間違いがない。次いで●が多いのは「アラセン」であり、長く何世代にも渡って受け継がれている様子がうかがえる。「アレヘン」などは、おおよそ70代以上のことばと見ることができるが、1956年生まれの1名にも●が見える。これが40代から70代まで○が続く、中興的存在なのか、それとも関西方言などからの影響として新たに入った表現なのかは定かではない。

語源から考えれば「ヘン」は「セン」が変化したもの。したがって、「アリャセン」のほうが古い世代で使用され、「アレヘン」はそれが変化した形として、より若い世代での使用が予測される場所であるが、表3の結果から見る限りにおいて、その予想は外れていた。興味深いのは、「アラヘン」とは、「アレヘン」「アリャセン」いずれも併用傾向にあるが、「アレヘン」と「アリャセン」とを併用すると回答した人はひとりもいなかったことである。岐阜市内での住所まで尋ねなかったため詳細はわからないが、地域的な偏りの可能性も否めない。

次に、一段動詞の「受ける」について、その否定形を尋ねた。五段動詞と同様の問い方を行ったが、ここでは地図3との比較がしやすいよう、結果表示の方法を変え「受ケヘン」(以下「短形」と「受ケーヘン」(以下「長形」と)の使用の差のみを表示した。●はどちらも差がなく使う場合、◎は短形の方をよく使う場合、◇は長形のほうをよく使う場合である。どちらも不使用という場合には×を記した。なお、いずれか一方に記入漏れのある場合の結果は示していないため、表3の人数とはずれている箇所がある。

1924-1929	1930-1934	1935-1939	1940-1944	1945-1949	1950-1954	1955-1960
●●●◇	◎×	◇◇◇◇	●◎◎◇ ◇××	●●◎◎ ◎×	●●◎◇	●◇

表4 岐阜市における年代別否定辞の使用（一段動詞・非過去形）

表4から特徴的なこととしては、1935年から1939年の世代で、すべての回答者が◇、すなわち「受ケーヘン」という長形を短形と比較して用いると回答していることである。この年代にはほかに3名

の回答者がいたが、どちらも無記入だった1名をのぞき、2名はいずれも、長形にのみ使用との記入があった。このことから考えても、この世代では6名全員が長形を用いるとの回答であったと考えることができる。ある時期「受ヶーヘン」のような長形が一般的であったのは事実として確認された。

前後に目を移してみると、より古い世代にも「受ヶヘン」のような短形との併用が見られたり、一方で、その後も併用もしくは短形の優勢が観察されるといったように、どちらかへ移行していることは確認されなかった。ただ、先ほどの長形全盛時期とこのデータからは見られる1935年から39年の世代の子どもの世代で、もう一度◇が盛り返していることは興味深い。1965年生まれの筆者自身も◇の類に入ることは前にも述べたが、これはこのような理由であると考えられる。

これまで単純に、語源的に「～ヤセヌ」に近い、音節数を保持した長形が古い語形であり、短形は新しく岐阜市周辺に入ってきた語形であると考えていたが、この考えは確かめられる範囲からは確実にでないと言った方が正確であろう。短形も長形も一段動詞の「ヘン」はさらに上の世代で岐阜市あたりには定着し、一度、1935年生まれあたりから、おそらく語源意識としてはその一回り前の世代からの踏襲であろう長形が中興し、またそれが併用なり、短形使用なりへと揺れ動いているのではないだろうか。やはりこれも、大きな流れとしては短形への収斂と見ることもできるであろう。

もうひとつ考えてみたいのが、文末で用いられる単純な否定と、否定の後に何らかの要素がつく場合との比較である。それは、後に何らかの要素が付加される場合、全体的な長さを短くしたいという欲求が働き、より短形の使用が期待される可能性があるからである。

岐阜方言の場合、相対的に古いナンダによる過去表示と、相対的に新しいンカッタによる過去表示の2種類の過去形式がある。過去の形式に対する選択と併せて考える必要がある。

1924-1929	1930-1934	1935-1939	1940-1944	1945-1949	1950-1954	1955-1960
●◇	◎◎	◇◇◇◎ ×	◎◇◇× ×××	●◎◇× ××	●◇◇×	◇×

表5 岐阜市における年代別否定辞の使用（一段動詞・ナンダ過去形）

1924-1929	1930-1934	1935-1939	1940-1944	1945-1949	1950-1954	1955-1960
●◎×	◎×	◇◇××	●●◎◎ ××	●◎◎◎ ◎◇	◎◇◇×	◎◇

表6 岐阜市における年代別否定辞の使用（一段動詞・ンカッタ過去形）

まず過去の形式について言えば、予想通り、ナンダは1940年以降出生者には用いられにくい傾向が見られ、ンカッタは1930年代以前に×が多く見られる。しかし、これも傾向でしかなく、「ナンダ」から「ンカッタ」への動きは、併用を経てゆるやかな移行期にあると見ることもできるであろう。

一方、否定に関して一見して言えることは、「ヘン」と「ーヘン」を併用するという回答が、過去においては少ないことである。併用しないでどちらを選択しているかという点、表4では、短形の方を相対的に使用することを表す◎が7つであったのに対し、表5と表6では、それぞれ5つと10と、やや開きが見られた。大きな数字ではないので確実なことは言えないが、この結果からは短形の使用はンカッタ型否定の使用と何らかの関係があると見られる。可能性としては、ンカッタ型否定が関西的な要素として、否定「ヘン」の短形とともに岐阜でも取り入れられたことが考えられるが、そのような関西方言からの移入がなくとも、ンカッタというやや長い過去形は、より短い形としての語幹を伸ばさない短形を好む傾向があるのかもしれない。いずれにしても、もう少し数を増やし、また未記入回答を減らせるよう工夫して、詳細を見る必要がある。

第3節では、県内の地域別、年代別さまざまな観点から、「ヘン」を中心に見てきた。十分ではないかもしれないが、共時的・通時的両面からの実態がかいま見えたと思う。「ヘン」については、さらに次節でも触れる。

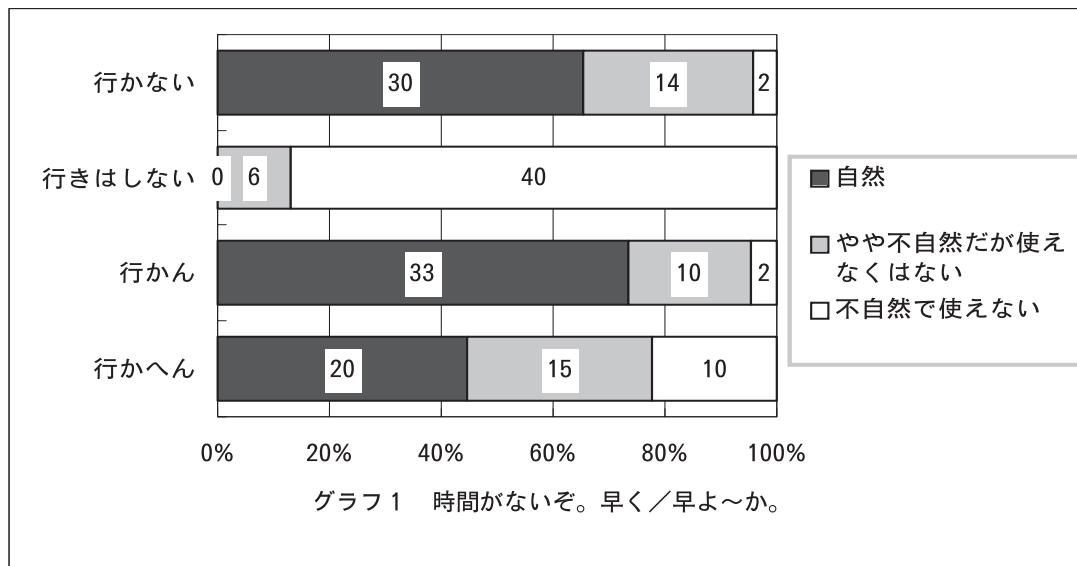
4. いくつかの文法的特徴についての記述

4.1 「ン」と「ヘン」の違い

一般的に知られている「ン」と「ヘン」の違いは、関西方言に関して、強い命令においては「ヤラソカ！」ということではできても、「ヤラヘンカ」ということはできないことである。

(4) 時間がないぞ。はよ{やらんか / ?やらへんか}!

このような使い分けについては、02年度および03年度の国語学各論受講者のうち、岐阜県出身者46名に限定して(4)のような文脈で「行かないか」「行きはしないか」「行カンカ」「行カヘンカ」のそれぞれがどの程度使いやすいかを問う質問を試みた。結果は次の通りである(グラフソフトの都合でグラフ中の方言形式をカタカナに直すことはできなかったため、すべてひらがなまじりで示す)。



筆者自身は、やはりこのような場合、「行カヘンカ」に違和感を感じるが、学生たちの世代で「行カンカ」ほどではないにしても、は「行カヘンカ」のような形で強い命令を表すことがある程度、許容される形式として受け止められていることがわかる。

このほかに、次のような質問文に対する答えの場合、話し手自身の情報について述べるのであれば、「ン」は「ヘン」に置き換えると筆者自身は不自然さを生じるように感じられる。

(5) A: 持ってきたかなあと思って。

B: {知らん / *知らへん}。

実際に3.2節で取り上げた談話では、このような場合に「ン」が用いられ、「ヘン」が用いられていない例が2例見られた。

(6) A: キタカナートオモッテ。

B: シラン。

(7) A: Sチャンワ ドコノ ガッコーイ イカッセル? ギフノホーカッタラテッテ。

B: ドコカ シランケドー タマニ デンシャデ ミル。ダイブ カワッタネー。

ただし、中濃地域の小学生の発話では、このような場合でも「ヘン」を用いている例が1例見られた。

(8) A: ネェ, ッテユーコトバワ ギフベンナノ? ギフベンナノ?

B: サァ シラヘン。

この点について、さらに詳細を調べるため、2004年共通教育受講生の内、「ヘン」を使用すると答えた学生に対し、次のような質問を行った。

(9) A: あんた、この場所知っとる?

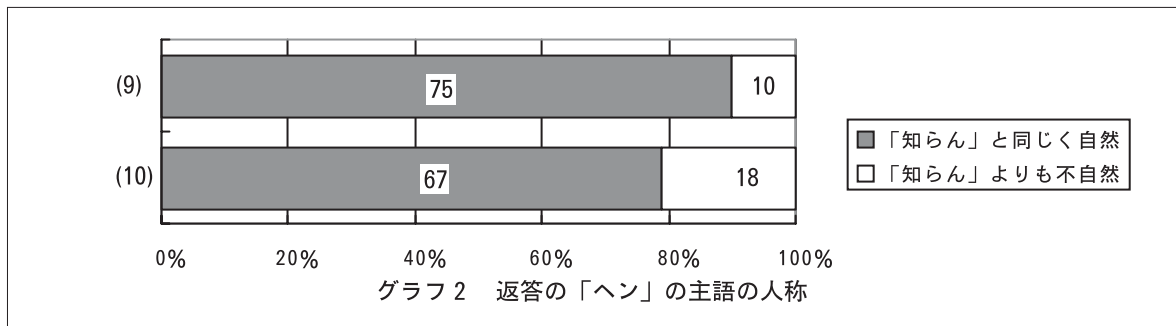
B: 知らへん。

(10) A: あの子はこのこと知っとる?

B: 知らへんと思う。

この2つの設問に、次の選択肢で答えてもらった。

1. 「知らん」と同じく自然 2. 「知らん」よりも不自然な感じがする
結果は次の通りである (回答者は岐阜県出身者のみ)。



この結果から見る限り、実際には、自分自身のことであっても「知らへん」と回答することを、若年層ではより自然と捉えていると言わざるをえない。しかも、第三者が主語の場合よりも「自然」とする割合が高いという結果である。

これは著者の感覚とは大きくずれているため、世代差を含め、再調査を行ってみたい。

4.2 接続の形式

共通語においては、テ形接続の否定は、おおよそ次のように表される。

(11) カバンを持ってて学校へ行く。(付帯状況)

(12) 顔を洗ってて歯を磨く。(継起)

(13) 風邪を引いてて学校を休んだ。(原因)

(14) 田中は富士山に登って、小林は立山に登った。(並立)

これらテ形は、共通語において否定になると次のように表されると言われている(山田敏弘2004c: 102)。なお、(12)の否定は(11)との区別がしにくいため除く。

(11)' カバンを持た {ないで/*なくて/ずに/*ず} 学校へ行く。(付帯状況)

(13)' 宝くじが当たら {*ないで/なくて/*ずに/ず} がっかりした。(原因)

(14)' 田中は富士山に登ら {ないで/なくて/ずに/ず}, 小林は登った。(並立)

岐阜県方言において否定接続の形式は、共通語の形式である「ないで」「なくて」「ずに」「ず」のほか、「ント」および「ンデ」も用いられる。これらの形式の使い分けに関して、2001年11月27日、国語学各論受講者34名を対象に調査を行った。この中から、岐阜県出身者と、この場合は愛知県出身者を合わせた31名のデータを示す。

調査した項目は以下の通り。

(15) 窓を閉め{ないで/なくて/ずに/ず/んと/んで}寝た。(非付帯状況)

(16) 包丁を使わ{ないで/なくて/ずに/ず/んと/んで}料理した。(非付帯状況)

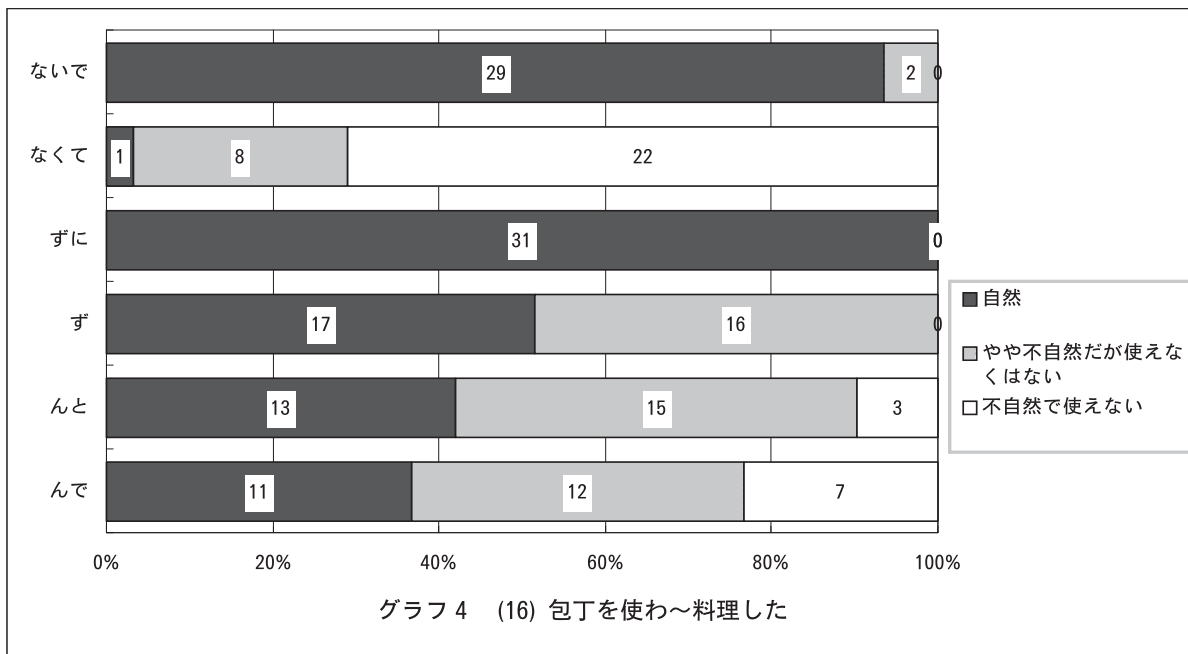
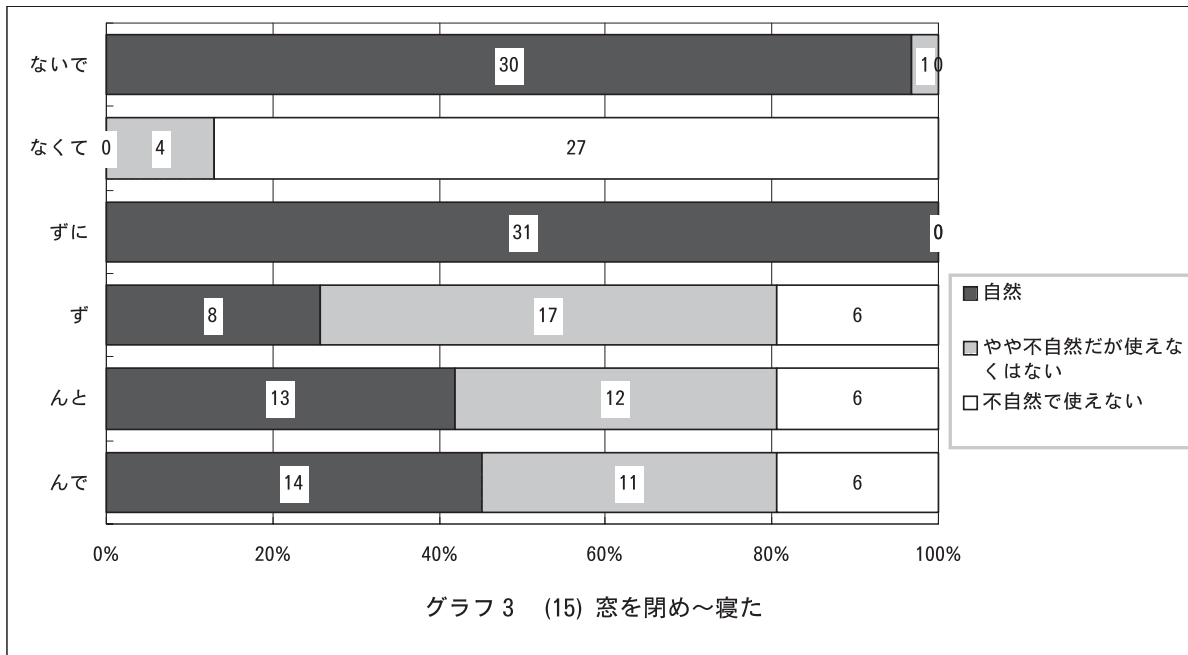
(17) 雨が降ら{ないで/なくて/ずに/ず/んと/んで}作物が枯れてしまった。(原因)

(18) アフガニスタンでは雨が降ら{ないで/なくて/ずに/ず/んと/んで}フィリピンでは洪水だそう
うだ。(並立)

「ント」と「ンデ」に関しては、例文の最後に「方言」であることを明記し、「枯れてしまった」を「枯レテマッタ」,「だそうだ」を「ヤゲナ」とした。

各用例については、「自然である」「やや不自然だが使えなくはない」「不自然で使えない」の3つから選び○を付けてもらう方法で調査を行った。

結果は以下の通りである。

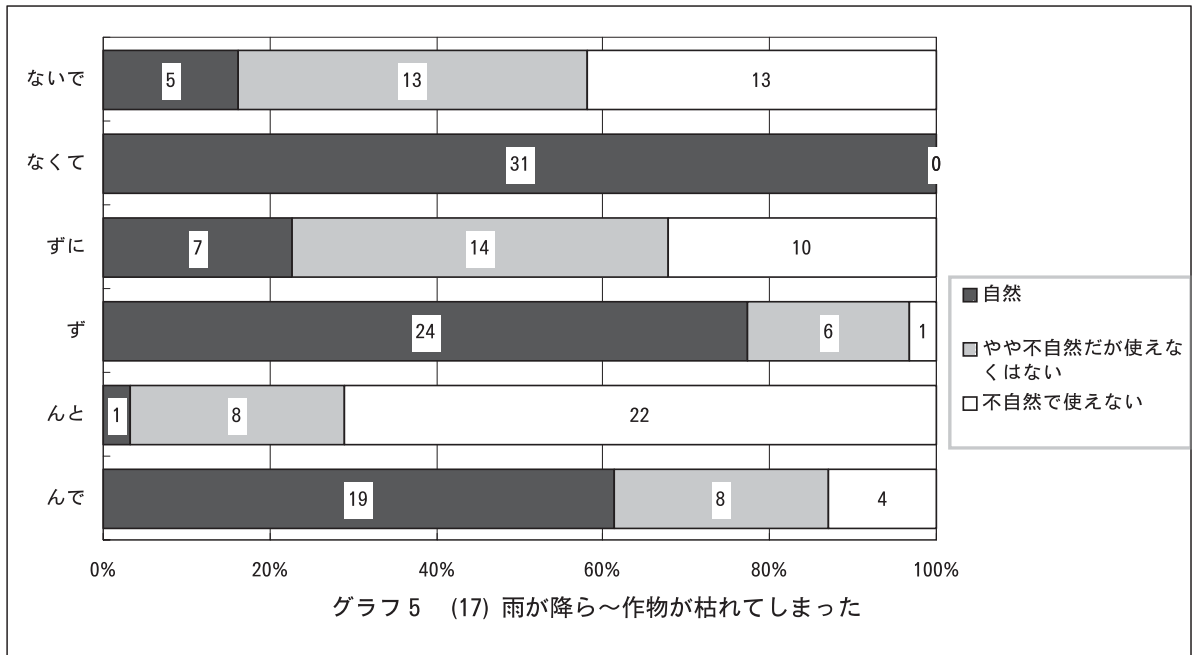


(15) および (16) は、後件が表す動作が生じる場合に、前件の動作が伴われなかった状態(非付帯状況)を表す。非付帯状況を表す場合、共通語の形式については、「ないで」と「ずに」の使用が一般的であり、「なくて」はほとんど用いられない。「ず」については、非常に揺れが大きい。

方言形式である「ント」と「ンデ」については、グラフ3, 4ともに、「やや不自然だが使えなくは

ない」まで入れると 8 割が許容している。方言形自体の不使用という側面を合わせて考えるべきであろうか。

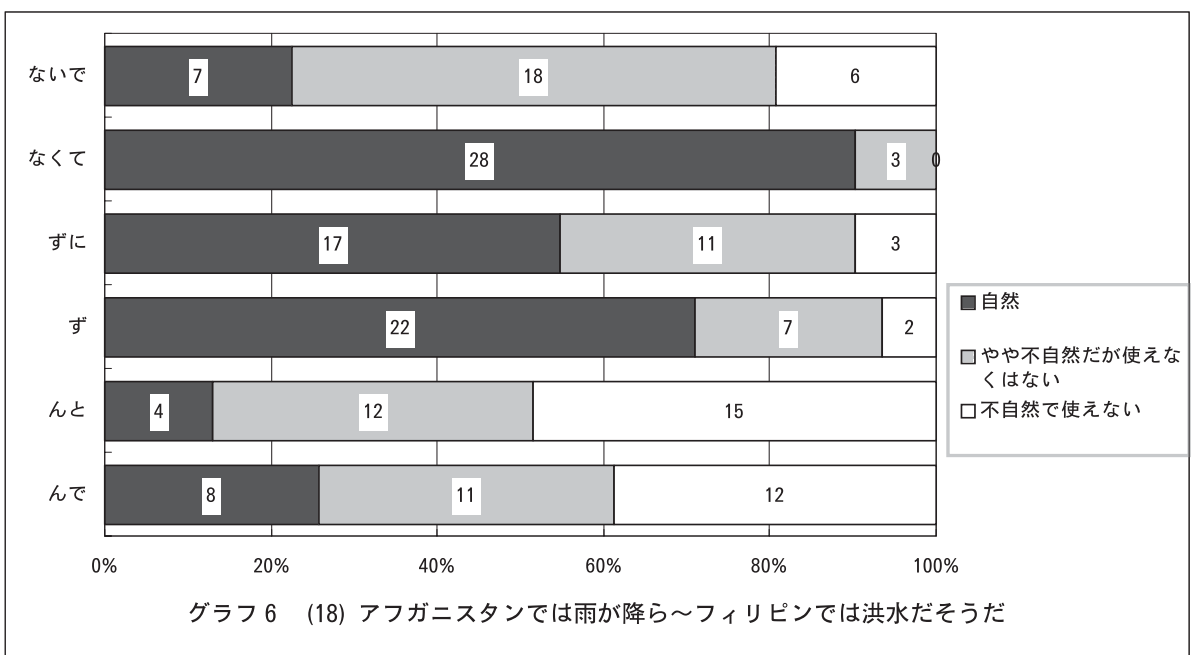
次に原因・理由を表す場合を考える。



共通語の「ないで」「ずに」は、原因・理由を表す場合には用いられない傾向にあるが、この地方では、半数以上が、「自然」あるいは「やや不自然だが使えなくはない」と回答していることが特徴的である。これはこの地方で「で」を一般的な原因理由の表現として用いていることと何らかの関係があることも伺われる。

方言形式については、「ント」の使用が非付帯状況に比べて低い。一方、「ンデ」は非常に原因理由を表しやすい形式と捉えられている。「ンデ」が否定の「ん」と原因理由の「で」の結合形として捉えられている可能性は高い。

最後に否定事態の並立について見ておく。



「ないで」「なくて」「ずに」「ず」はいずれも、「不自然で使えない」とする回答は非常に低い。しかし、自然さからすれば「なくて」が用いられやすいことがわかる。

方言専用形式である「ント」と「ンデ」については、いずれも「不自然で使えない」とする回答が半数近い点が特徴的である。

方言の接続形式としては、非付帯状況では「ント」「ンデ」とも用いられやすく、原因を表す場合には「ント」ではなく広く原因・理由を表す「で」を含む「ンデ」で表される傾向があることが、この調査からわかった。並立を表す場合には、「ント」も「ンデ」も許容されにくい傾向が見られた。筆者自身の母語話者としての内省からは「ント」も「ンデ」も並立を表す際に使えそうな印象をもつだけに、これがなぜなのかは再度、詳細な調査が必要となるであろう。

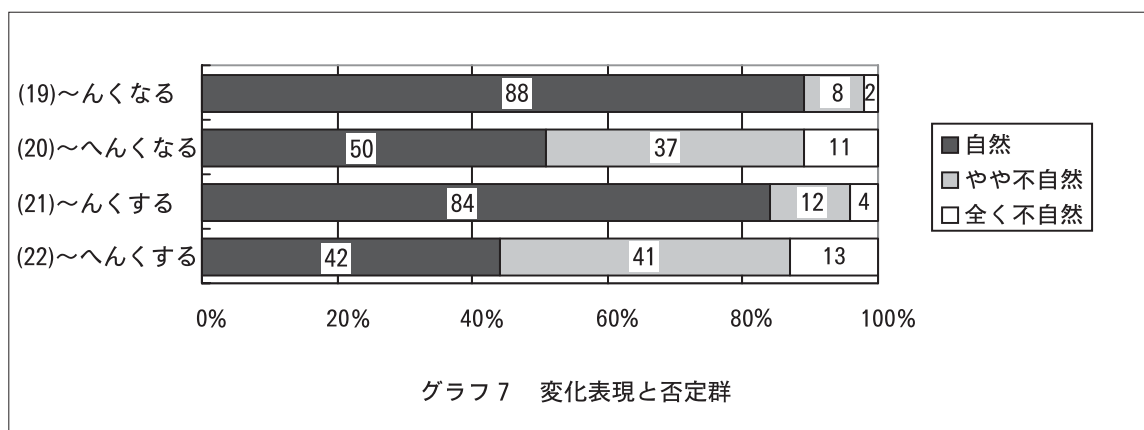
今回の調査では方言形式として「ント」と「ンデ」のみを調査した。これら2つの形式は相対的にみて古い形式として広い年齢層で使われている形式であるからである。しかし、最近よく使われる形式である「ンクテ」については調査できなかった。また、否定接続には「ン」を介さない「デ」が使われることも、すでに奥村編(1976:299)の郡上などの方言の記述として指摘されているように存在が知られている。このような形式についても詳細の解明が待たれるところである。

4.3 変化の形式とともに用いられる否定辞

山田敏弘 (2004a:78) では、変化の表現である「ナル」と「シル(する)」との否定辞との組み合わせについて、従来からの「～ヨーニナル」「～ヨーニシル」が、「ナル」に関しては「～ンクナル」に移行したのに対し、「シル(する)」については、「～ンクシル」という形がまだ一般的には用いられていないとの記述を行った。これは、岐阜方言話者である筆者の内省によるものであるが、実際にはどうであろうか。今回、2004年度共通教育「岐阜県方言のしくみを学ぶ」受講生の内、岐阜県内出身者97名に対し、次の4つの表現の自然さを3段階で評価してもらった調査を行った。

- (19) このペン、書けんくなった。
- (20) このペン、書け(-)へんくなった。
- (21) 特殊なペンキで、壁に落書きを書けんくした。
- (22) 特殊なペンキで、壁に落書きを書け(-)へんくした。

結果は、次のようなものであった。



県内ほぼ全域で用いられている否定辞「ン」と、併せて地域的な限定はあるがよく聞かれる「ヘン」について、「～クナル」「～クスル」との共起形式が自然に感じられるかを問うたところ、「～クスル」が否定辞「ン」「ヘン」いずれとの組み合わせにおいても「～クナル」よりも、自然としたものがないという傾向は見られたが、筆者の予想とは大きく異なり、差は大きくなかった。

一方、原稿締切ぎりぎりになって中高年層以上からもデータを取ることができた。3.4節に示し

たものと同じ岐阜市出身者34名の結果である。こちらは「～クナル」と「～クスル」についてのみ問うたものを示す。◎は「～クナル」の方に相対的な自然さを感じると答えた回答であり、◇はその逆に「～クスル」に相対的な自然さを感じるとした回答である。●は特に両者に差を感じないという回答、×は両方とも使わないという回答である。－は未記入部分のある回答を示す。

中高年以上のデータからは、「～クナル」は自然であるが、「～クスル」はまだ自然な表現とはなっていないことが、はっきりと見て取れる。

1924-1929	1930-1934	1935-1939	1940-1944	1945-1949	1950-1954	1955-1960
◎◎××	××－	●◎××	◎◇××	◎◎◎×	●◎××	××
－		××	××－	××		

表7 岐阜市における否定への変化を表す表現「～クナル」と「～クスル」の比較

表7では、「～クナル」のほうを相対的に見て自然とする回答である◎が、その逆である◇と比べて、やはり多いと言っていいただろう。

なお、蛇足ながら、両方とも使わないという×の回答者は、その他の選択肢として「～ヨーニナル/～ヨーニスル」を用いるとのことである。過去否定として「ンカット」を用いる世代であっても、「～クナル」は使いにくいものであることが、表6との比較からも分かる。

山田(2004a:78)には、「『～んくする』の形は、まだあまり聞かれませんが、『～んくなる』との対応から使われるようになるかもしれません」と、変化の傾向を示唆しておいたが、これらの結果から、実際には、「～クスル」が使いにくい傾向は中高年層以上で顕著に見られるが、すでに若い世代において「～クスル」は、「使われるようになるかもしれません」ではなく、「使われています」と書き改めたほうがよいかもしいという結果となった。

5. まとめ

本考察では岐阜県方言の否定に関する表現について、現段階で得られている資料をもとに考察をしてきた。

終止形について、岐阜県内での「ヘン」は、美濃地方で一段動詞が「食べーヘン」から「食べヘン」へと移行していると考えられる結果が得られている一方、飛騨方言では若い世代でも、「ヘン」を依然として用いないなど保守的な傾向が観察されることがわかった。

また大学生のような若年層では、従来、岐阜方言において使い分けられてきたであろう、方言形式の使い分けが、十分に行われていない現状も示すことができた。いくつかの方言形式の消失とともに、このような方言形式の使い方の伝授というのも、ひとつの教育の課題として取り上げられていってもよいのかもしれない。

そもそも、否定辞として「ン」のほかに「ヘン」が使われるようになった理由は、「ン」が形式として非常に短く、分かりにくさを回避するための、いわゆる語の治療の一種であると言えよう。しかし、動詞の接続形式も未然形に結果として統一された2形式「ン」と「ヘン」の併用は、言語の経済性から言っても冗長的であると言わざるを得ない。地図2に示した●が、なぜ、このような冗長性をもつ2形式を併用するのか。

その答えはまだ出ていない。しかし、グラフ7に示したような変化を表す表現が後接する際に、「ヘン」の使用がやや抑えられることから考えると、文表出の意図が否定にあるときには「ヘン」を用いることによって否定であることを十分に示す必要性が表れやすい一方、変化など他の要素の表現に組み込まれたときには「ヘン」は経済性の観点から使用が抑えられるといったことも考えられるであろう。

本考察は、本文中にも多く示したように、課題を示すにとどまった箇所も少なくない。その点で十

分な考察とは言えないとの批判もあるであろう。しかし、現在の方言の記述においてもっとも遅れている分野の一つであると考えられる方言文法に関しては、このような記述を積み重ねることによって、多くの研究を促すことも、また必要なことではなかろうか。「ン」と「ヘン」のような問題も、関西だけで考えるのではなく、「ヘン」を用いる東端部である岐阜でこそ見られる現象を併せて考えていくことで、より明らかになっていくだろう。

なお、否定に関して残された問題としては、すでに山田敏弘 (2004a) でまとめて示したように、他にも反語の「～スカ」や、否定並立の「～スト」、名詞述語の否定並立の「～ヤナシニ」など、共通語には見られない否定に関する表現について、地域的な差異とともに、世代間での使用の実態の推移をきちんと描いていく必要がある。また、第2節で空欄となった形容詞の否定形については、音便形を用いた「アコーナイ」や「アカナイ」と、形式名詞を用いた「赤イコトナイ」についても、「赤くない服」のように名詞を修飾する場合と、「その服は赤くない」のように主節の述部として言い切る場合とでは、若干、使用に差が出る可能性もあるなど、より綿密な調査が今後も必要である。

いずれも、岐阜方言における否定は、形態、機能両面において、今後の課題として調べていかなければならない課題の多い現象である。

【謝辞】

本稿をなすにあたって、県内各地のインフォーマントの方々、郡上郡各地での調査依頼にご協力下さった郡上八幡文化センター図書館（現 郡上市はちまん図書館）のみなさん、金山町婦人学級のみなさん、岐阜西ロータリークラブ会員のみなさんにご協力頂きました。ありがとうございました。

【参考文献】

- 岩島周一 (1996) 『飛騨の方言』 高山市民時報社
 恵那郡教育會編 (1903) 『東濃方言集』
 奥村三雄編 (1976) 『岐阜県方言の研究』 大衆書房
 岐阜県立郡上高等学校方言研究会編 (1952) 『郡上方言』
 芥子川律治 (1971) 『名古屋方言の研究』 泰文堂
 杉崎好洋・植川千代 (2002) 『美濃大垣方言辞典』 美濃民俗文化の会
 瀬戸重次郎 (1934) 『岐阜県方言集成 全』 大衆書房
 土田吉左衛門 (1959) 『飛騨のことば』
 二村利明編著 (1988) 『馬瀬村の方言』 私家版
 山田敏弘 (2002) 『ぎふ・ことばの研究ノート 第1集 飛騨方言資料に見られる文法項目』 科研費報告書
 山田敏弘 (2003) 『『郡上方言』の文法』 『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』 52-1
 山田敏弘 (2004a) 『みんなで使おっけ! 岐阜のことば』 まつお出版
 山田敏弘 (2004b) 『ぎふ・ことばの研究ノート 第3集 方言談話資料とその分析①』 科研費報告書
 山田敏弘 (2004c) 『国語教師が知っておきたい日本語文法』 くろしお出版
 山田敏弘 (準備中) 『ぎふ・ことばの研究ノート 東濃方言資料に見られる文法項目』